

國學院大學 教職課程科目



ICT教育の理論と方法 第10回

# ICT機器を効果的に活用した実践①

高等学校情報科教員 稲垣 俊介

※宿題の入力フォームは私のWebにあります。

# 次回以降の発表について

- 発表スライドの表紙と最後に氏名, 学籍番号を入れておいてください。
- 発表日は12月18日, 12月25日, 1月15日となります。
- 作成するのは50分の授業ですが、授業内で紹介できるのは7分となります(申し訳ないのですが、発表準備を含めて7分で切らせてもらいます)。
- 発表の際に利用するのは自分の端末です。私の端末はお貸してできませんので、ご自身でご準備ください。
- 全員が発表していただくつもりでおります。ただ、発表できるのは1講義あたりで発表できる人数に限りがあります。
- もし前半で発表する学生さんが少なければ、後半は希望者が増えるかもしれませんが、それでも発表できる時間は増やしません。

# 最終レポートについて

これまで本講座で学んでんできたこと、  
さらにそれを踏まえてあなたがどういった教員となるのかをまとめてください。  
タイトル、章立て等の構成は自由です。  
(しかし、必ず、タイトルつけて、章立てをしてください。)

理由の如何にかかわらず、未提出者の提出物は「受理しません」。

提出は12月18日から1月26日です。

12月中から少しずつ書いて、最後の授業を受けた後にまとめも含めて書き上げる、という書き方がいいと思います。

みなさんの素敵なレポートを読めることを楽しみにしています。

**前回の課題提出より**

# 実習A

皆さん(稲垣を含む)の意見を聴いて、  
さらに思うことがあれば自由に書いてみてください。

(一部抜粋) 欠席数の問題について、三分の一以上休んでしまったり、学校が設けた日数登校できなかった場合には、どんなことがあっても進級できないようにしなければなりませんと思います。病気やけがなど同情したくなる事情があることも事実だと思いますが、学校は授業を受ける場所であるという事が前提であると思うため、出席には厳しくすべきではと思っています。

グループワークについて私は社会科の教師を目指しており、社会科の特に日本史の授業を想定していますが、議論してほしい項目があっても難しく事前知識が必要だったり、結局教科書を参考にした正しそうに見える答えを生徒が選んでしまうのではないかと考えます。そうになるとワークの話題設定や事前知識はかなり工夫しなければいけないと感じました。また、生徒は教科書をつい見てしまうのでワークの話題を教科書をもとに設定すると生徒が答えを知ってしまい、話し合いにならないと考えています。そうなるとおのずと教科書と関係ないワークになると考えますがそれでも良いのだろうか考えています。

(一部抜粋)時代によって基準が違ふ、同じ特性でも授業の形式や評価の仕方によって先生の見方が異なってくるといふ点はぜひ考えるべき議題だと思いました。じっと座ることができる生徒も、活発に動き回る生徒も、どちらの生徒も評価される要素を持った授業がある意味平等なのかな、と思いました。



(一部抜粋) まずは探究をしてみても、それから足りない知識をつけていけばいい という先生の言葉にとっても感銘を受けた。やはりまずは動き出さないと何も変わらないと自分も思う。

（一部抜粋）多様性、障害を盾にして免罪符にする現代社会は私もとても実感しています。なので人はみなそれぞれという言葉で丸く収めようとしなくてほしいとも思ったことがあります。みなそれぞれであっても認められないことはあり、それを強く強要してしまったらそれは障害を持っているからという理由はただのきっかけにしかすぎません。障害を持っている方を批判したいわけではなく、むしろその逆で自分ができることであれば積極的に行動したいです。ですが、そのように免罪符にされてしまうとこちらの立場がなくなります。人はみなそれぞれだからこそ、優位に立とうと思っははいけないと思いました。

(一部抜粋)「私は障がいを持っているのだから、みんなができていないことができなくて当然だ」という人が増えていることを取り上げられていましたが、私自身も同じようなことを感じていました。偏見ですが、最近、ADHDを持っていると発言する人が多く、また「私ADHDだから」を何に対しても、物事のできない理由に使っている人がいます。実際にそうである人もいると思いますが、怠惰なものをADHDによって理由付けし自分自身を誤魔化す人がいるように思います。

(一部抜粋) 休むことによって他の子があの子休んでいいなら自分も休もうとなるのであればそれは1回や2回注意するだけであとは自由にさせればいいのではないかなと思います。高校生であればもう義務教育でもないので自己責任でいいと思う。中学生ならその子は体調不良で休んでいるということだけいっておけばいいのかなと思う。

(一部抜粋) 日本史や世界史などは教員の講義が中心の授業になってしまっていた。内容も教科書通りであった。もちろん、分かりやすいように授業内容は工夫されていたが、誰もがおもしろいと思える授業とは程遠く、進学を考えていない生徒にとっては苦痛な時間だったのでないだろうか。結局、授業のあり方を変えるためには学校内や大学入試における評価のあり方が変わらないと難しいと思った。

(一部抜粋) 私は中高週6日、毎日学校に行くというのが当たり前前の生活をしていたので、心の調子が悪いから休むといった経験がなく、高校三年生の時に出席が足りない友達は退学になっていた。いじめやハラスメントを除いた心の調子が悪いから休んでもいいという環境にいなかったため、対応策が分からないと思った。ただ、その環境に置かれた経験のある人が考える対応策だと、思い入れ込みなどで心の調子が悪い人有利、何もない人不利な策が出るような気がしたので、何もない人が気持ちを出せる限り理解し策を考える事が良いのかなと思った。

# 実習 I

今の話、「あたりまえのアクセス」についてあなたはどのように感じましたか？  
あなたの素直な感想や意見を聞かせてください。

(一部抜粋)やはり、やらせてあげたいがそのままやらせてあげることはできないと思います。

何らかの制限や、補助が付いてしまうかもしれませんが、どのような人にもかなえる権利はあると思うので何らかの形でやらせてあげるのが一番ではないかと思っています。



(一部抜粋)あたりまえへの欲求が想像よりも色々である中で、ものによってはそれができるなら我々もそうしたいと思うようなもの、少し大げさに言えばわがままじゃないの?と思うようなこともあった。障害の有無に関わらず便利になるような技術で解決されるものだなと思うものもあった。例えば運転なら自動運転はどうだろうと思う。ただ、並べないけど遊園地で遊びたいというのは、並ばないでokとするわけではなく、どうやって並ぶのを苦にならないようにするのかと思う。

介護等体験で放課後デイサービスに行かせていただいた。  
そこでは、私にとって「当たり前」であるようなことを目標として日々努力している子たちがいらっしやった。今回の話から、彼らは「あたりまえのアクセス」を目指しているのだなと感じた。

(一部抜粋) 列に並びたくないから並ばずに遊びたい、運転免許証をとりたいなどがあるが、自分に何かしらの病気、障害があることがあるから配慮しろということは違う気がする。並べないから列を無視して遊ぼうとすることは普通の人と比べて平等なのか。病気、障害があるから運転免許証を与えもし事故を起こしても責任は取らない。これは合理的配慮なのか。すごく難しい問題だと思う。

(一部抜粋) 障害などが理由で夢をあきらめなければいけない、やりたいことができないのは良くないと思います。しかし夢などにもよりますが、一般の人と同じ夢を持つ場合は可能な限り努力はしなければと思いました。実現の有無は別として本人が夢を追いかけるサポートは必要だと思いました。自分たちのあたりまえと本人が思い描くあたりまえとの溝を埋め合わせることから始める必要があると思いました。

# 実習3

この授業で学んだことを「深く」考えて書きましょう。

(一部抜粋) 授業を面白くするしかない、評価方法を変えるしかない、という言葉の「しかない」には悲痛なものを感じた。それでも諦めず、せめてなんとかして面白いものを見つけて欲しいと奔走する教員という仕事はやはり一筋縄で行かないものなのだと思った。

大学生の時の水泳の話を聞いてリアルはしんどいなと思った。今は特別支援でどうすることが最善か、どうしていきべきなのかなどを考えているが、実際自分が育てる立場になったらそのように考えることは無理だと思う。それでもどうするべきなのか考えて最善は尽くしたい。

(一部抜粋) 差を埋める努力を続けることは大切という言葉は本当にそうだと思う。差があることは認めざるを得ないことだけど、差を知るだけで満足せずに、埋めることができるように自分ができることをしていきたい。自分が支援しているということに満足して押し付けるのではなく、できる限りその人の意思を尊重しなければならないと思う。



先生がおっしゃっていた『差があるのは当たり前だけれどその差を埋める努力をやめてはならない』という言葉に非常に共感しました。国語科教育法の授業で「音読が当たり前前にできない人がいる」ということを知りました。そのような悩みを持っている生徒の為に、音読の仕方(一斉読みや追い読みなど)を変えてみることも一つの手だと思いました。

字が得意でない人はスライドを使うべきというお話があった。これについて私は大賛成である。私は以前あまり字が上手ではない教員に教わったことがある。解読とまではいれないが、読むのに労力がかかってしまう。理解しなくてはならないのに読むのに時間を使っていてはもったいないように思う。また、その教員の教科は国語であり、書道も教わった。書道についておっしゃっていたことはその通りなのだが、どうにも説得力がないように感じてしまった。このようなことから、教員はある程度の字の上手さが必要なのだと思う。

当たり前前のアクセスを読み、理想と現実のギャップは当人と同じかそれ以上に周りの人も持ち得るように思いました。当人はどうすることもできずとも、周りの人はその配慮をすることが枷となっていることがあるからです。どうサポートすべきか考えてしまいました。

(一部抜粋) 特別支援学校の先生方は、私が今まで通ってきた公立校よりも生徒の個性をより理解していますし、理解しようという姿がありました。もちろん特別支援に対する詳しい知識は必要にはなりますが、生徒に対する教諭の姿は誰もが見習わなくてはいけないと思いました。触れないようにという今の形は、私たち教諭になりたい人間に限らず特別支援をよく知らない人々にも学ぶ機会狭めて、理解を促すことができない行為ではないのかと思いました。

(一部抜粋) 2日間の体験でとにかく現場の教師がやることが多すぎて大変そうにしていたので、今後特別支援におけるICTを促すためには教師の意識や設備を変えるというよりもまず教師が生徒に向き合える時間を増やせるような環境を整えたり、どこまでが教師の仕事でどこからは教師でなくてもいいのかの見定めをする必要があると強く感じた。

(一部抜粋) 特定の人へのICT機器の利用を優遇ととらえるのではなく、その人にとって必要な措置であるのだと理解することが大切だということに関するフィードバックについて、欠席日数などでそれぞれの事情に優遇する措置が、第三者のとらえ方によってはそれを不平等ととらえたり、誤った解釈をして自身の誤った行動に結びつけたりと、教員の判断一つが全体に悪い影響を与えてしまうリスクがあることを学び、教員にとってそうした判断は非常に敏感になる必要があると考えさせられました。

(一部抜粋)障がいの有無に関わらずみんな誰しも制約を受けているだろう。ただ、こうしたい!という思いを表現することや、実現できないやるせなさを表現することができるのはやはり国語であろう。自分の気持ちを言語化することで、自分の求める「あたりまえ」を理解できるのかもしれない。

私は以前まで、障害のある方に対して支援してあげているという考えが嫌で、障害のある方は支援がなければ生きていけない人ではないと極端な考えに走ってしまった。しかし、障害の有無に関わらず私自身にもできることやできないことがあって、家族であったり友人であったりと補い合いながら生きている。支援なしには協力なしには人は一人で生きていけないと思うし、私にできることで誰かを前向きにできたらいいなと思う。



(一部抜粋) 差についての話では、個人的には差を埋めるのではなく、縮めるための制度等はあるのかも良いのかなと感じました。一定にしてしまうと社会主義的なものになり、働き手や努力する人が減るのかなと感じます。

そして、総合的には全ての人と同じ分野で同じベクトルで頑張らなくてよく、人に合ったニーズ、活躍できる場を提供する、支援するのが私たちの今後の働きなのかなと思いました。

(一部抜粋) ICTの利用で、自分の理解に合わせて単元  
を遡ってやり直すことがもっと簡単かつ当たり前になれば、  
ある意味無駄な時間を減らすことが出来るのかもしれない  
と考えました。

障害や困難の有無にかかわらず一人ひとりに合った教育が求められている中で、自分たちの理想を考えることは簡単にできてしまう。実現が難しいと思われることでも簡単に言えてしまう。しかし今回の授業を通して理想の形を目指して、すぐに実現することは難しくても少しづつICTの力を用いて近づくことができるのだという前向きな気持ちになった。

(一部抜粋)持っている障害にもよるかもしれませんが個人差がある中で、教育機関側が分けるのではなく、本人たちが望んでいて自分に合った環境を選べるような多様な選択肢を用意できることが理想だと思いました。そのため、一緒に学ぶことをあきらめることがないような授業を作るのに改めてICTの重要さを感じた。

# 実習A

皆さん（稲垣を含む）の意見を聴いて、さらに  
思うことがあれば自由に書いてみてください。

# 質問をどうぞ

発表の質問を受け付けます。

もしなければ、今日はこれでおわりです。